中村俊定文庫
文庫 18
620

早稲田大学図書

天明丙午　雪中菴蓼太叟

探花の集ハ之編　小林某

中村俊定文庫

六印

住の江や松越る雪八お深きる　百羅

さて鐘しあまり花か未ち鳴ま　浪花　雁啼國

桔ゝ川桔梗よ秋ハ立よけ也　得忠

旭瀧は小唄せし人穂の首　上井飯野　雀汀

探芳春の部

青柳や我之と露とくてとまり　不塞子

蓬生萱かしの中かるむ清泉　桂花女

初若水のかよきや山の影の手長　駿府　蓋來

色井は口ふくらし水白の音　浣花

人おなこのもとわかたの香　篆阿

春のくハ箏なんとかまて井　上井町田　浅耳

えりや卯の一天の陽田川　沙羅

世の中の国栖と称す巴のたれ　之紘

いぬ衣や又新井の人かつる　栖蛙

立しまの非亀尾やちる硯　訳象

探梅の二字て知くられ初硯　故流

色井や器よつしき春の水　白麻

むめは思ての不足るをかし　雲壁

梅柳さくハ咲まされの風　上井檍鳴堂 吏楓

鶯や鶴くよしる花仏　小田原 暁長

うくひすや嫁さぬの梅後ろ川後へ　丞経

鶯るや餘鳴るとさる二日月　房州平磯 東路

鶯の依つ経さくあく風情れ　駿府 棣宗

七くさやりのほる林のみえぬめきあ　下井小石川 川牛

鶯やいつくふへもすまさん　駿府稲情 桃蹊

若菜つみ翁あゆよまやさん　不寒子

人の手に捨香まさく今に眺ん　仝

鶯やうるゝ便みの小松原　故流

梅の花嵐のふみ句ひの香　越後 既明

鶯の小枝いさゝ入てわ聞也　駿府 箕山

若菜るや手つんなま摘み花ゝ御さて　仝 一雅

若草ハ鳥や庭もむせん梅月　蘭助

句すさひ夜や瘦ぬむさしめの香　上井坂井 露澄

武よりも香を撰る梅の枝に　白麻

滝の浦渡人やおぼろ月　下井納戸 之蝶

、

春の日はしばし休人のかげかな　季州去 嵩主

たそかれ雨に衣掛たる風の夜かな　花映

義人や娘の父に似も母に似す　之綾

藪深くと古江の桜深くゆく　完来

春とおもく香もなくまた梅の香　四鵠

、

京中に来の嬉し橋や松の花　不寒子

夕霞行乳の出かゝりはた亀　おなまし

寝まゝに花や忘れん猫の妻　普成

はるの風軽尾ふる也あやめ草　嵐亭

青柳や白わもとまる千還鈍　女 まつみ

我の身は腰をかし織の男昭女　一貫

唸ふる雲の志すりれ猫の恋　完来

むつかしき物とのみ柳かな　嵐亭

春雨や活て詠ん梨花一枚　錦城子

籔入の数もしれて宿　仝

雛みや作りなやめる心の花　武府中 維谷

すゝ柳は秋のゆるその根なり　上サイハシ 露白

底を掃くはいもすひさる柳かな　老坂 巳人

生き写す鈴虫や地の柳哉　左席

世ハ入や数の川の傘　鼓声

牛喰て春待て遣る夕哉　駿府 一雅

うすくより落せる鷲の数かな　仝 松宇

春三月春と三色の柳かな　長裕子

切れ申せむかしてや山の笑ひかな　不寒子

うけうふの色もやいろん従姿　フシコ 馬平

はなのふ二たはりぬ旅衣　すゞ子

春は海おもへは節く菱垣かな　不寒子

大るの園や水の手なきるさいはま　似衣

越湊田
咲れ花の渦十二子や去の水　菊二

全田中
空に漏る雲のひに栖る心の水　嶋月

遠刈川
花の外も安堵とめてけり　知来

全　森
さかふや花といふ年の花　蕉三

雨ふらぬ月のはけふ八年し　旭丈

菊さなり笑手鼓の書兵　若州小浜
大ぬ

去の家もとまつをきいつ枯落　三紀

初午や梅の花くつ挽は楽　不寒子

きつむ年や田中は神の十字街　挿紫子

房州
傘ゑうむ鳴くつけり旅の蝶　端石

小田原
涅槃会や仏事は奥の書見　山丸

物くもしやあうむもうはる庵　海曉

出るやまの姿を松に雛　青橋

物しりのやから入連て庚申　方壷

山河有道灌死而春裳艸　完來

後のしらぬのよ事頭く桜穂　竹苞

二番は思ひ寄人雨の雛　百鏡

湖に浮巣をあらんも悪　完来

蝶さへ何風生て眠り花　穂仕

苗代や土筆を人のちの草　志頑

雨の雛ゆるさとき海あれ　仝

乙鳥やちかいてまた飛しまる　上井今留　竜花

帰るよりすてゝぬ雁のあとの風　仝　吏楓

傳授しゝ桜穂んて来る窓　雨静

飛石に銭ほしくちる穂草　芬露

鳥の巣に文かしも憂かな　蘋山

日の蝶折し櫻をもちて飛　信州松代 花足

心ぬすむや櫻よつとる人心　亡人 祇風

ふる雪のまたとのこりし初櫻　いや足

たよりなきものゝ雛の徳ゝ栞　文鳳

絵姿も添て帰洛する雛かな　雪堂

茶の湯出来よい香来たる夜の雛かな　秋梓

むさくるしきものぬる雛の人形かな　綾綱

おもてから車もうへや七夕櫻　野梓

あやなりや花盗人と云ふ一言　玉宇

こゝ梅もむかしほとりは花の紙雛　小田原 巴陵

春の海桜鯛ゝのあけぼの　後岩枝 康巴

雛よとてのうきさそふや小袖　綾塚子

世のもの命あらたと別れけり　後ホフク 汝鶴

和歌も人噂みな吹ぬける花の雨　沙羅

夜嵐や花ハ桜よむる嵐　仝

千本花の中をさはそくかゝる岩石ハ　上サ　童花

咲きるよあつんハかむよ満つ花　仝　帰帆

大傘よ門の庭前川桜の紅　一貫

若鮎や花のいけハさて思　仝　我文

浦桜や数ある中に桜人　蘭女

花おもしろん夜桜余桜　苔江

御遊びの桜乃中より上の曹子　可圓

学るや七開き地々の河原桜　後保祐詩　川柵

辰ぶかく露ともなく金の鼓　仝三ヶ夕　以篤

又さきよ思ひ枝入鶴の影　巳丈

おさくこ二八あまり老木ハ　後府　居逸

とめたいの花ちゆるさき庵の花　勢寺

三舟するやものより帆のけ紅　能七二　志鳴

着くるゝおもしろきつゝじ　諸蝶子

山吹や真花折れと鳥より　竹舟

行春をつくつてゐるなりけり　房州大川 走舟

夏の部

更衣持続のもし製衣吟気　左席

肩ぬぎかくれよ扇や寺　尾州名古や 得魚

袷きてもち扇枝とつかむ　意朝

更衣伽羅めくる衣果　上州大久保 松笑

りんせうを揚人も待白雪　射年

九龍のつゝ手もあらざらや　卯也

袷きてまつ花活むかし　習水政 起翠

橘よむかし袷初めてさうり　下州羽根川 正丹

更衣文の人来道やはじめ　善米

古ほとゝぎす生る佛かな　竹道

厳やも牡丹のもとの古り泥　滑息

真昼とうつらうつら花出堂　栖鳩

深しさもあふの雪乃ねむりや　物我

本数の一節道や都ぶ　可因

咲ぬしてなむの眠くるるを挟み　遠江掛川　四明

けふの中の藤蜷しゆめ　葭枝　東巳

開くやまき一露かつて牡丹哉　海呪

佛よし草あひらやと花出堂　上州横田　五柏

下にあつま見べく牡丹ちらも白牡丹　仝町田　流舟

けふの峯しも盛とかへり　夜雪

ありさし麝の如し初茄子　葭枝　艸二

日のほかの橋と笑ふ初鰹　以息

杜若淡や七草ハ古流さ　不寒子

夏荒や花で蝶よ怒る　笠堂

日さかりや一夏中の筆さはき　宗米
青麦や麹はおもての落し　仝
茂よりも友こそ秋の一和亂　栖鴎
すゞしさやまつりの後疲れ　眉丈
むすびめやる々の御渡り行田　百丈
墨染もむかしの男のきぬたかな　呑竜
海をとき帝とおもふ初鰹　秋桴
うかうかと我が見る也美人草　上州　射集

滋屋に蛇苺かざしけり　蘭女
初松魚は沖は螺鈿の光かな　素丸
江戸もから一筋道や初鰹　東都森　茶花
七人近くな仏中からかつはおれ　起翠
筆やおもひのよる垣ひとつ　作良　竹笆
若葉やすきき秋より隣しく女子花　花足
九ッの襖ひらのよ稀相もし　尾良　意紅

千〻の帆とゝまるや五月雨　ズンフ 左更

入梅もろきゝ人笑しくろ馬　得泉

痩馬のかちにも落し競る　竹道

労れ梅の廚さへ上る火影かな　都尚

夕立や鴨居よめくる梓の音　東奴

涼ひろけ親ある競る　スンフ 桃子

五月雨や七瀬越してまた下　房呂 [illegible]

白粉ハ志らぬ里もあり麦の秋　不騫子

井手よ蓮曽田の法堂浮みけり　宗来

蝶もまた人をおもしいちごかな　雲擘

法の花も走りとま少る涼舞　フニコ 木奴

黒あ内ゑよ蝉かゝの夕端稲ふ　小田原 山花

ききれぬ[illegible]の出そ[illegible]　雪笹

峰ちかく[illegible]　高成

里の子よく涼む薮の下露　淵月
園畑とりもなく生けり　蝶也
、
余きいうて積ける虎耳草　淵竹
石まり涼しく背して夏小袖　月之
汁よ葉て粽を捲よ恋なる　全
、
うこうけ紋ちの涼やゆうる　淵羅

秋は夕よもうひけ吸蜩　錦城子
おとなしく男あやなるる　淵月
梓ぬなくよ家の火振の水鶏かな　素丸
をとめ女や鍋のよふ家はなき　後之夕　桜井
競へる一房よ落し火事よ　秋梓
陸奈よ子ゟ湧てゆるき　傍田　橘叟
陽みのも秋の雲やそのこる　嵐州　仙露
槌果の日や赤坂垣のむし縄　東白川　一木我

耳塚に耳もきこえん五月雨　魯河

ともしやおしへいづこに二諸　雪洲

ゆふたちにゆるきの森の若樹かな　スこフ 左更

涼さ有よるさへ息や牛の貝　仝 亀六

虫干や濱の木に一掛もし　雞助

一すのあをしもしめぬ清水哉　金童改 五舟

蚊やつりぬ雲の木はしらに苫ろう　女 萱路

月の形になさんとする夏の月　梅也足

消残る雪のまゝをや古用千　一要

白雨や裸に立る水の雲　君魚

蝿打て人落る名の西桐かな　左摩

うけ針のまだひとつ晒かな　小田原 め藍

むしけや兜のうへに般若梅　仝

色報や汐来に花の下雫　仝 暁長

昼顔や花のこぼす古周波　妙薫

むしぼしや女ばかりの男めし　吞竜

雷干やけし蓑むしも父恋し　似紅

浚井や男女蓋を和布刈ぬ葉　三ニ　まぬ

ほりし井や星は青磁の昔韻　東舎

、

夕立や少人の中に休出　フニニ　巴人

はよきさらみ御旅の由占清ぬり　仝　馬年

赤やなの色も俄に櫨麻　蘭芳

夕顔やあふみあきこうほもしるか　雲翌

掘し井や筆の跡平　阿艮　文氏

抱籠や近よる秋と人の如　雪佃

、

六月や線お涼せる西涼　鼓舌

冷し酒小町の花葉尾鴿ぬり　秋梓

夜は翁のやうて追ひぬ夏のまく　武府中　雪堂

六月の初日の影や中了の花　駿田中　一峰

早乙女やかさの中から見る出なし　房民益木　麟鉉

秋八月入る影すきとり　沿恩

さの上て帰りしの蝶の加ゝ花　駿山岸　活梅

すきすゞめ八個と松の声　巳丈

夏の日や滝津流天気つゝ　竜ケ井キ　太如

ことりちゝる毛との流しの若竹　くわか　一鷺

麻の葉に人くまし夏蚕　章草

まんしく中を流の影こしきれ　ニ々　指井

上道の頭を先へ米の稲　故流

穐の部

秋風や蛛立鳴の八幡羽　上サ大多喜　一鷺

風を吸ふものや濁むしの秋　我文

秋兵月佛ひかりの森さへ　完来

蕣に白骨の花咲にけり　冠羅

星祭やいつも占める人の色　卯色

七夕や女ごゝろの手はじめん　下井 萬歳

志つのまや二葉十葉も桐一葉　武府中 有覚

手向や流し魂棚に子を送兌　云都

稲妻をこゝにとまむ女かな　松丹

人々にあはせて芋にもを送　月吉

聞きて閉れ稲もめし　雲葉　阿州 文風

蕣やゝ吉水の庭のおもかげ　月吉

みのむしは母を世乃人まゐり　海暁

古ゝらにも[illegible]おすむ遅渡　梅信

金銀の気をつ避瀬の盆哉　以暦

とかく老に二人限志てる角力哉　左麿

茶をわれ縁を仇なり秋の風　略花

木かげにも松虫鳴人まゝ向の家　里言

陵れ草よむさの二勢虫の秋　青橋

憂支と祝ふ手もあり秋の蝶　上井川名　谷戸

一星ハみな濃月似乃景山かな　龍翠

、

松風や夢の別るゝ安達ヶ原　達琴

橋舟よ鳴る擬宝しら入江かな　東羽

川あらし此ハ人とりし鯨の蝶　五舟

一ちハんめうとあつて縄の名　仝

鐘聞て鋼貫世あれ今宵の月　上サ　浅年

、

名月や今二万余石の図雨　故流

えつくしきのはかんなす十六夜　下サ　三蝶

みな涼しく洲しらぬ番椒　女　さよみ

水も花も雪もあるきし月と雪　阿川　文風

子の母海の酒盛めくんぞ今宵の月　上サ　竜花

世界梅肉志門ちてひしひそれし　仝　浅年

明月や水ハ無かりし稲の妻　小麻

待宵乃待夜とかゝる月見かな　可静

名月はほとゝきすしりたを　三絃

胡の浪のえりえれたのつき　水智の沙　中和

名月の網のますほよ花露　晩鳥

明くや余年さき花筏衣　巣鶯

待宵も秋ふ末ぬ和の中の月　駿田中　燐月

旅人や咲さまれ行五一林　武府中　雪堂

はつ汐や月まよ入この如　五柳

秋の名き雲とい(ん)きりも　ふ二相方　佐紅

太らまや武蔵の御代の物語　河羅

西汐のあかりよ柳の月　駿府　梧泉

冬まくら枕をせもこの前生をかり　小田原　有隣

康節も月見ての夜まき諸鶴のしおれ　慶之

白菊のちるきはなしに秋ハ行　房州 梅舎

合せみると恨むもあり人きくの花　老鳥

嘉もとえんしと菊ハ何そのかれ　方壺

、

種の山ちるりめし黄菊の色　駿藤枝 弄蝶

なきのおもあつめつるかな　浪花 風竹

飛こへ山風の雲よりつ行　雪來

行膝よ観やつかれしののめ　雲望

妻まつむ里へ今吉き初菊のさ　白麻

此迄の月わよあへる秋の夜は　小田原 如蟻

二夕いそとハ今宵の浦の名月　志も別 葵之

浦しく樽ハつまの浮うれ　冠羅

、

鯱よ志らしも錦の夜と成ぬ　一雲

志まろや浪萩雁子乗小袖　奥白川 林丈

折くれる枝の小菊おほつかな　蘋行

豆ゝ粟や川基の杖に兜ひろ　市交

しゝ枯や傍よりさする神路山　故治

賤しらや孤城遥に人を思ふ　大川　太船

新茶の麦や薮くて其後重居客　雨静

夕三の辻夜海のあやすれし　白麻

秋風に乃のさもあさる鶴に　敬雅

康帝や嵐のあとのはじめひ雨　房州　幸月

呉竹をひしくの中に秦の庭　庵主

今ともし菊一輪のゆかりに　小田原　如蕙

花の跡むかしの男やもの秋　君兎

就中立よる山おもとくつ紅葉に　武府中　風篁

晩人やとひされハ小枝路　上サ　射年

枝ぶりきやすあとる盤の罫十一　全ヨコソメ　五柏

横書ハ路なき世のまぬるに　フシユ　巳人

常人吹く戦ぐ笹はなき嶋　竜ヶ井キ　大如

漁火の曲実より戻る初潮哉　巴丈

飛んし涌閑まては敵ぬぞ刈　雨静

道よりの花豊の錦や落水　吉橋

右近江錦捻村や暮の秋　右桂

冬の部

傘に音あるつる哉　房州　文甫

伊吹いふ雪の端ありてつげにけり　尾州　意翁

志らぬ野のよたよ人　武蔵府中　柄如

今朝けさはんをやや初時雨　久川　四明

ゆふぐれみや田鶴吹くけむ　房州　瑞石

幸浦の夜を十との時雨松　小田原　素兄

二空や小山の月　月堂

哀帳の文今夜の雨　房州　豊川

世をはなるゝ桜や終ハん胴代哉　駿三七ゝ　沾吏

ゐよくらる川と先ハ成帝ふ　遠州　爽主

むつまれてハともなる友なる　浮奥

小袖風情の番をとる人行列　舎十

いかくれし幟なりしの浴の衾　芝汐魚

見ぬ人も多年数の顔中に　一鷺

ハ宗しも和光の月乃十夜に　信州松代　似志波

散るとハこれも志らぬその花　仝　志交

連のちやく先けも胴代哉　紀州　佐知紀

し〻ハ世と春のしらぬ花ちらぬ袖の衣に　武府中　打木

ねふくよまるハ友呼ふれも鵆　佐次

三ッ輪くむ船を立入る光哉　左摩

炉開も魚乃あかるや東講　一鷺

ひよしきやと尾越の鴨や後夜の鐘　萬廣子

竹城より帰りて淋し冬の蝿　白麻

志ら／＼の蝿つくる花桜榾　仝

淋しさに鶴追立る榾けふり　信州松代 松成

麦蒔やまつさかりなる新酒　仝 花足

世の中の人ゝ蔦黄の生海嵐から　スンフ 梧泉

まし新海に安房の畑を掘りり　上サ刈谷 江尚

頭巾きて読よむ人の女かな　五舟

冬の海淺ぎる浪の花哉　フシコ 馬耳

冬籠や人目ハのかぬ江戸桜　仝 巳人

大鵬ハ噂ともなく鯨かな　仝

榾の火や子すりつくと実語教　房州 貫風

狐なる女を祓ふるみ女房哉　一丞

夜神楽や般若に化けて百万樹　房州平塚 宗芳

冲し汐は浜の言をやる波に　東野

からの字の汁と新る頭巾かな　一丞

嗚つゝみて命志るしぬ鉢叩　駿府枝 東巴

夜興寒や大根とひいて庚申見　仝 路山

枯くさも月のあかる野辺かな　東里

手のひらに火灯し侍や霜の庵　秋梓

、

凪てさなはとて霜や投の海　房州 文甫

客留ゝ蘆荻に庵をかゝり　起路女

水仙や河の紙にて咲流しけり　上州泉川 配摩

風やさの尾ひとりすゝき花　班石

花とつんたる人のあわちや枇杷の花　之駱

枯尾花焚て見る火の明りかな　京花

落葉やひらく隅ゝて雲に鵜　一鷺

朋友有信

鰒汁やむかしの友ハ片たより　仝

このかの京一見にはよ光やせむ　起翠

たり須天として私はおとも冬の月　一鷺

眠らむとて洩月や夜興引　嗽石

、

夜興引ハ親ハ親代ゟ別り刈　栖舩子

鹿の独やはやるの春乃ゐる　彭城

襟はりしく蛩鳴生乃冬月　沾洲

皺の網浦ゐひしくも見ゆるゝ　小田原　眠石

ひ巾ぬ小佛かなのやふゆ胡　仝　素兄

噴つじゝの蕪もらふ手網至汁　蕉枝　路由

鮑汁やかくて沈くも武蔵野　幸刈森　菊平

削らん穴の藁乃み冬鏡　仝

足のよし雪えらく冬篭　蕉江　曾登

魚るし文字ぬかれまくのゆか　嗽石

、

ふとけるむめなくまとれたる　不寒子

作麼生とはりふえのら皺の皮　白麻

明中ゝ解綿あやまふゆの月　旭丈

夜のあゑのふとく吉すく　一要

けつまつく道にのみや桐火桶　晋洲

茸賞清洲智々の妻のたふさかな　海雉

日の嵐ちらす等食んとかな　信州松代　松成

思ひしりの妻あれかしれる落葉やま　小田原　山花

菊の香や芝し女の紀文　竹也

錦家舟やそしれ歎きしまを　空

就中の暮々夕とろもや枯野原　仙志

峯間竈や月とゑとの高洲　百丈

おのゝ玉の木々の葉あるゝ木々慶ゝ　披雲子

桃紅よ零の落るしも椛り　敬雉

中しくも枯ぬ紀し淋し冬の松　嗽石

やうく道級んともる枯野原　五舟

居眠りかく居文稿もる火鉢かな　月舎

志しりと思ふて出す火鉢かな　五舟

含むん柳ハみとりの霜の縁　柳雪

煤はきや竹も我日と十二日　州雁

東山さらにもしろし雪の名残り　房州　似晩

今つゆの修る寒し冬の梅　信州松代　杉羽

尊しる仏小山の里をめくる亀　眉映

寒念仏まる石橋の張りの外　武府中　蓬拮

酒樽の味方よあつて雪の朝　上州　司尾

鉢叩きゆかる我ハ親にも知る也　起嬰

、

青くと雪竿の命つけり　柳雪子

園低ぬしめしなや積る雪　左丈川　壱船

御名や罷も乳の沖とある氷　上州　雀汀

書あるや粉衰えて鉢扨　白麻

玉子の酒如之ハ卵割る命の哉　嫩乙

雪竿や横のつるくまさしまし　月桑

雪の跡やうくひす来る松杉難　小田原　山花

、

ふるくれハ空ハ道なし雪の原　不寒子

日枝ハ見えて景つハ雲に隠れ庵　嗽石

鳥の声くもるゆきの梅か枝　混一

讃ふれハ雲に流るゝ冬川　軽舟

降雪や志て漁火織る海の上　慈星

其山て妹そよるらん雛卯酒　五舟

鮟鱇やよみ見を探るゆきの足　月吉

なのくお膳清ゆかく骨清　如荘

、

見よ刈るゆきまの雪の下紅葉　越後田中　蛾月

ゆきのかなる紫に対く餞使　龍髪

秋の世も友に継て帰り道　善来

掉さしや人の為にと雪の舟　紀州　志鴻

相関ほとハ昔なりけり夜の雪　仝　春江

節分や初の古き松の雪　下サ仁良 東鳥

猿しや人をしらく雲の路　ふ寒子

年内立春

家を吹まる時も見たり　白麻

川もしをとしつて猿を宗探　雨静

二夜とへるま花ひらとし哉　月之

糸の時あけ秋のきぬ配　玉吟

中流るより○の字やきぬ配　武蔵中 季嫌

大象をと言目の探れ師走かな　淡庭

川年○不二や淤泥の芙蓉　一鳴

ゆるしつ人も声より月なれ　峨山

雑

証も我とまきつるゝ念仏る　淡羅

歌仙

初月のまつおほろき也郎こ　蓼太

虫つ秋よつ豊の里く　仁麻

何まだ大深布流大川風尓　、

理のとよのとこつ手髪結　太

市ふさ夜麻涼ぬ眼の赤き男たち　、

鴨の毛かくれたまゝの小　麻

そのつ寺小城の櫓打込み　太

並ちて、おもむつ婚礼の饗　麻

傘よ根の添しけちのし　太

所落して橋の掛之　麻

中秋荒てむつのの町八所斗　太

いのちもち大難子丸嘲を送る　麻

所なとまゝ十六夜の紀の旅て憂　太

栗むきためる雨のつれつれ　麻

釜屋に紅葉ふ絞りたる竹田山　太
行道さはし法のまひら　麻
盗人の類くまぎれし此小袖　太
羽織よたくゐる凍氷の泥　、
律はやし同し人を連てさき　麻
紗の絽よの紫ゐる椎櫻　太
日八ゐよ佛法僧と峰の声　麻
月八稔たえての蓮よめくく流るる　太

新羅海船に響する也野　麻
むのふ境て白扇たしまる　太
れつけつぶあひし物や耳なり　麻
十九吉日の飯との汁　太
うさし森の陳ノ亭こそ起　麻
泊くの一夜開帳　太
宿り風ありや雲ある月のあ　麻
年とゆて為る稲のすなを　太

梅翁の籬は生ひ庭の秋　麿

きのふけふぬ夜ひ露かく　太、

日本の古き源まゝ入道　、

梅印揆み為稲城名　麿

斂葉の呑口たてし竜の右　太

場れ大源へ上下の表　麿

[illegible]

書肆
西村源六梓

9668